



## レジデントの情景

## MY LIFE IN NEW YORK

12

# ALL THE BEST!?! また会う日まで?

白 賢 Hyun Baek  
ニューヨーク大学歯学部補綴科大学院



1年間に渡ってお届けした留学日記もついに今回で最終回。プログラム在籍中の3年間、日本の開業医ならではの視点から、留学情報や生活のなかでの気づき等を少しでも皆さんと共有できればという一心で書き綴ってきた。本連載の話は、プログラム開始直後にあったのだが、最終学年が始まるタイミングで開始になったのには訳がある。レジデント1年目の頃は、プログラムを修了できる自信が全くもてず、とても留学日記を書けるような状況ではなかったのである。開始早々ドロップアウトする者、他科へ移籍する者、ファカルティの理不尽な叱責に涙する者、進級できずにキックアウト(解雇)されてしまった者さえいた。今度は自分の番ではないかと、私自身もプレッシャーとストレスに何度も押しつぶされそうになったが、しぶとく卒業までこぎ着けることができた。だが今までの人生を振り返っても、優等生的なポジションとは無縁だったし、そもそもそんな評価はどうでもいい。今この時点では「卒業」という結果だけが必要なものであり、これから努力を継続していくことのほうがはるかに大切だということを知っているからである。

### 臨床留学の意味

これまでの留学中、日本から見学や

卒業研修コースで来られた先生方に「留学って意味ありますか?」と聞かれたことが何度かあった。まず私の場合、キャリアの最終ゴールは歯科教育、特に「臨床教育に携わること」である。そのためには、歯科医師の育成を体系的かつ実践的に行っている米国のレジデンスプログラムで学ぶ意義はあると思ったし、6月号で述べたように日本には本格的な専門医養成のための臨床教育プログラムが存在しない以上、私にとって留学は必要不可欠な選択肢であった。

留学は一般論として、人によっては価値があるだろうし、ない可能性だってある。留学の機会を生かすも殺すも、やはり本人次第だろう。臨床経験豊富なベテランの先生なら、「留学なんてくだらない」「知っていて当たり前の内容をわざわざ海外まで行って学んでどうするんだ」と思うかもしれない。またすでに開業し、仕事も私生活も充実した日々を送っている先生だったら、「自身のクリニックを代診に任せてまで留学するのは、期間と費用を考えるとナンセンス」と考えるかもしれない。

だが、そもそも幸せの尺度は、人それぞれのはず。なのに、日本人は特に社会の決めた幸せの枠の中に当てはめ、社会の決めた尺度で自分自身の能

力を過小評価し、人生を歩もうとする。その枠の中では幸せなはずなのに、何となく幸せという実感が沸かないまま、人生を歩んでしまうこともあるだろう。ただ、世間が決めた幸せの枠と自分の枠が違うと思ったからと言って、「留学してしまえ」「飛び出してしまえ」と言ってるのではない。

### あなたにとって幸せとは?

留学する・しない以前に、一つ伝えたいのは、まずは「自分にとっての幸せとは何か」「人生をどう生きるべきか」といった自分自身にベクトルを向けてみる必要があるということ。自分の将来のビジョンは何で、歯科医師としてどんなキャリアを築いていきたいのか? 結局、留学もその自分のビジョン、自分なりの人生のゴールの通過点や目標達成の手段にしか過ぎない。

もちろん、いつもすべてが上手く思いどおりになるということはない。どれだけ自己分析し、未来をできるかぎり予想して人生の選択をしたとしても、理想と現実のギャップは絶えず生じる。完全に理想どおりの人生なんてあり得ない。留学することで得るものもあれば、失うものもあるかもしれない。それが人によっては留学以上に大切なものの可能性だってある。だから、

その覚悟はしておく必要があるだろう。ここで悟るべきは、自分の歩いて来た道と将来進みたい道の分岐点が必要で来るので、そこで人生の軌道修正ができるよう、十分準備しておくことだ。そのうえで環境に恵まれて、チャンスがあるならやってみるのもいい。イングランドで行われたラグビーW杯の日本代表の試合をご覧になり、いろいろと考えさせられた方も多だろう。勝利の女神は、周到な準備を行い、勇気をもってチャレンジした者にしか微笑まないのだ。

そうとはいえ、これから30歳を過ぎてプロ野球選手になりたい、ミュージシャンになりたいと言うならともかく、歯科医師の場合、仮に正規の大学院に入れなかったり、ポストグラデュエートプログラムに採用されなかったとしても、日本に戻れば職探しに困ることはない。元の歯科医師としての生活に戻るだけなので、何も恥じることはない。フリーランスという意味では、われわれ歯科医師という職業は、企業からの駐在員のような手厚いサポートを海外で受けられることはないが、そのかわり誰に憚ることなく、また会社から突然転勤や出向を命ぜられることもない。医療系の場合、特に臨床留学の場合に限った話かもしれないが、基礎系研究者や私費でMBA留学した者のように就職の心配もなく、社会的にも経済的にもある程度の身分が保証されているし、自分の実力次第でその存在価値を高めることができる。歯科医師にとって臨床留学とは、それほどリスクを負わずに、自分の夢を追ってその可能性にチャレンジできる素晴らしい機会だと言い切ってしまうのは言い過ぎだろうか。

### 私が留学で得たもの

私はこの留学を通じて、ある意味本

## 米国歯科専門医教育の最前線 Postgraduate-Programで教えている「診査・診断」

小誌で連載中の二人が、アメリカの歯科専門医養成大学院で教えている「診査・診断」、そして専門医教育の本質とは何か、を伝える一日セミナー

講演 「USC 歯内療法科では何をどう教えているのか? USC Endo が大切にしている診査・診断」……松浦 顕  
「NYU 補綴科で教えている診査・診断について ~私が学んだ補綴臨床の真髄~」……白 賢

日時 12月27日(日) 10:00 ~

場所 都内 参加費 1万円(昼食代込み、先着40名)

<申し込み・連絡先> nyupgpros2015@gmail.com (白宛) まで

当の「自由」を得た気がしている。自分の意思と希望に応じて自身の人生をプロデュースできる自己決定権。お金や肩書きといったことより、グローバルなスケールで、ほしい情報やネットワークが自由自在に手に入り、これからは日本に限らず生活する場所、仕事内容、職場さえも自分で決めることができる。そして開き直りでも強がりでもなく、この3年間、粛々と努力し続けることで身に付けた知識やスキル。とことん考え抜き、さまざまな経験を積み重ねることで得られた歯科臨床に対する確固たる信念。それは誰かに勝ち誇るようなものではないけれど、私自身の中に宿ったとても静かだが、揺るぎないものだ。

未来に思いを馳せるにはほど遠く、毎日毎日、その日を選び切ることを考えて過ごした補綴科レジデントとしての3年間もようやく終わりを迎えた。よくもまあ、これだけいろいろなことが起こり、その度に乗り越えてきたものだ自分自身でも信じられないが、苦難の連続だったNYUでの修行の日々は、日本でぬるま湯の生活に浸りかけていた私自身を十分ハングリーにしてくれた。ラクロスでの挫折

が留学を決意する最後の決め手となったように、人を突き動かすものは成功体験よりも、もしかしたら挫折や何か物事に対する問題意識なのかもしれない。

最後に、私の挑戦を快く応援してくださったばかりでなく、本連載という貴重な機会を与えてくださったナオ歯科クリニックの鈴木 尚先生と、いつもお世話になっている歯科医学教育国際支援機構理事長の宮田 隆先生に感謝を申し上げたい。お二人がいなければ今の自分はなく、留学はおろか、歯科医師という職業がこれほど奥深く、魅力的なものだと気づくこともなかっただろう。いつも心配と苦勞、迷惑ばかりかけてきた両親や姉、弟にも感謝したい。昔の友には変わらぬ友情をありがとうと言いたいし、ニューヨークで出会った皆様とは、留学がつかないでくれたご縁をこれからも大切にしていきたい。そして最後に、最愛の妻○○に捧げると書きたいところだが、それは人生の次のステージの宿題として取っておくことにする。

本連載の裏話などを知りたい方は、下記のブログを Check!  
<http://nyupgpros2015.blogspot.com>